

■ 編集だより

編集後記

東日本大震災が生じた後の精神科医の反応は様々である。何よりも現地に駆けつけて、精神医療を崩壊の危機から守り、患者の治療継続と住民の精神不安を沈めることを第一と考える者。たとえ被災地には行かなくとも、派遣される者の後方支援をしようとする者。また、自分が担当している患者の治療に遺漏の無いように持ち場を守ろうとする者。研究活動に専念したいのでそれ以外の仕事は引き受けたくないという者。筆者の周囲にはこれらに該当する精神科医がそれぞれに存在するが、もとよりひとつひとつのパターンだけを取り上げてその価値を論じることは意味をなさない。自分の周囲に、自分とは違った行動様式を示す者たちがいることを知った上で自分の行動を決めている場合もあるだろうし、様々な立場で本務を尽くす者たちが存在してこそ、被災地という局所での活動も成立するからである。

こうした行動様式の多様性は、精神医学、医療にそもそも内包されているものともいえるが、今回の災害ではそうした多様性を超えて、精神医療に携わる者としての共同意識が強く発揮されたように思う。震災直後に、臨床だけではなく動物を使った基礎研究をしている何人もの先生方からも、何かできることがあれば手伝いたいという申し出を受けており、その中には精神科医ではない、記憶の分子研究をされている先生までもおられた。災害という危機的状況の中で、基礎と臨床とを問わず、自分たちの専門家としての営為がどのように被災者の役に立つのかということも多くの方が真剣に考えていた証であろう。

しかし被災者に限らず、患者は常に危機的状況にいる。地理的に限局された災害という事態だけではなく、疾患、社会状況、生育環境、それらはひとつひとつ、精神健康にとっての危機的状況を構成するはずである。そうした危機に対して様々な専門分野の人間が結束して協力するという意識を、果たして日頃の私たちはどの程度持っていたのだろうか。そのように自問することも必要かもしれない。

かつての教養主義的な講座運営が、片方では台頭する生物学主義によって、他方では講座の枠を超えた社会精神医学への臨床的ニーズの高まりによってほぼ解体して以来、大学であれ研究機関であれ、精神医療、医学における認識と実践の総合の座としての務めを果たすことはますます困難になっている。経済学者が市場に想定している「神の見えざる手」に相当する総合的な調整機能は、現代の精神医療においては非常に見だしにくくなっているといえよう。

しかし今回の災害後の多くの方々々の活動を見ていると、危難に際しての暗黙の協働が非常に効果的に働いていると思われる。しかも個別の医師、チームの活動というに留まらず、精神神経学会の災害対策本部に結集しているような多くの団体、組織が相互の連携について高い意識を持っていることにも改めて驚かされる。すなわち多くの精神科医の間には神の見えざる手としての専門的な共同体意識が育っていることを改めて確認した思いである。

当雑誌の編集委員会では個別の論文について徹底した査読意見の交換がなされているが、そこでは常に、読者会員にとってどのような意義があるのか、大きくいえば日本の精神医学にとってその論文はどのような位置を占めるのかということが意識されている。投稿論文の内容は多岐にわたっており、専門外の論文を議論するときには四苦八苦することが常であるが、そうした作業を反映した雑誌の内容が精神医療の共同体意識の育成にいささかなりとも寄与していれば幸いである。

金 吉晴